

「高井」第三十四号別刷

前山古墳発掘調査報告書

中野市教育委員会

## 前山古墳発掘調査報告書

### 中野市教育委員会

#### 調査経過

今春「七畝の藤沢栄治氏が自分の山畠を整地し、農作業の能率化をはかりたい旨相談を受けたが、そこには古墳があるので、この藤沢氏の意向を汲み市誌編さん資料の立場からも要請され、発掘調査を行なうこととし、諸般の準備を進めた。六月一八日付をもって発掘調査を行ない藤沢氏の意向を入れてほしい」旨、市文化財専門委員会金井明夫氏と市誌編さん委員長針谷功氏から市教委事務局へ話しがあった。

遺跡分布図、文獻からこの古墳は周知の古墳であるが、地元の藤沢氏の意向を汲み市誌編さん資料の立場からも要請され、発掘調査を行なうこととし、諸般の準備を進めた。六月一八日付をもって文化庁長官あて八月一日から発掘調査を行ないたい旨届出をした。七月一日には市文化財専門委員会が開かれ、現地へ出向き現状の調査を頼った。市教委は諸手続きと共に発掘体制の準備を整え発掘調査の編成を進めた。その構成は次のとおりである。

調査責任者 土屋 忠男 中野市教育委員会教育長  
顧 問 金井善久一郎 信濃史料刊行会編纂委員 長野県文化

財専門委員

調査団長 金井 游次 中野市文化財専門委員 日本考古学協会

員

田川 孝生 長丘小学校教諭 日本考古学協会員

塙原 長則 中野市更科自営 長野県考古学委員

金井 正彦 界中学校教諭 長野県考古学委員

小野沢 捷 中野市農業委員会事務局 長野県考古学

会員

金井 文治 小布施町教育委員会事務局

調査補助員 中野市教育委員会事務局

調査協力員 長針 功 池田寅男、藤沢栄治、小林行保、長針 正

畔上克臣、地元七瀬区、市土木建築課

事務局 中野市教育委員会事務局

教育次長 古川 光夫

社会教育係長 小池 章夫 同 主査 町田 佐久

六月二八日（土）文化庁長官あてに前山古墳発掘調査届を提出（発掘調査は八月一日からとする）

七月一日（火）市文化財専門委員現地踏査七月二九日（月）晴

多霧 古墳の現況、地形測量を行なう。東西、南北各二〇メートルについて二メートル毎に測点、縦断、横断面のレベル測量、等

高線を入れて地形図を作る。

七月三一日（木）晴

明日からの発掘調査にそなえて用具等の諸準備をし現地へ搬びテント張を行なう。

八月一日（金）晴

炎暑 午前九時全員集合、発掘調査につ

いて打合せ会を持ち、古墳頂点部で供

養の説明、つづいてくわ入れを行ない、

さっそく作業を開始する。地表から約一

〇センチで早くも土器片が出土する。再び掘り下げ、遺構を

確認して第一日の作業を終る。遺物は

土器器片二〇数点。

参観者 中山義市氏ほか。



第1回 横丘全景

八月二日（土）晴 猛暑 前日に続いて発掘を続ける。鉄鏟、直刀を検出、なおこのほかに副葬品ありやと慎重を期すも土師器片一〇余点のほかに出土品なし。

参観者 金井明夫氏ほか。

八月三日（日）晴 猛暑 午前中は更に遺物を探すも土師器片数片のみにとどまる。午後は古墳の構築状況調査のため東西、南北に徒横に掘り割る。

参観者 保科 公氏ほか。

八月四日（月）晴 猛暑 前日に續く作業は午前中で終り、午後は測量後収取作業をすませ周辺調査を行ない今回の調査は一応終りとする。

参観者 黒鳥信行氏ほか。

一〇月一三日（日）晴 地主藤沢氏が整地のためブルドーザーを導入するとのことで再び前山古墳へ赴き、ブル運転手中島健氏にたのんで徒横にちぎり、地層の調査を行なう。鮮明な地層の断面によつて、古墳は豊野層の乳白粘土層へわずかに斜行する褐色砂疊層の地山へ、こく簡単に墓拭を構成した構造を確認する。

参観者 藤沢政宣氏ほか。

### 立地と歴史的環境

ル前後の標高で多少の起伏がある。

前山古墳は中野市大字七郷字前山一二四二番地の二（台帳面は原野）にあって、七瀬部落の西側の山腹に所在する。五万分の一地図ころに当る。ここからは、七瀬部落を足下に、東北には中野用状地、南方には延徳田畠が展開している。また、中野市の東南部に点在する金鑑山古墳（新野）、嵯峨山古墳（更科）、紫岩古墳（栗和田）をはじめ、山ノ内町の本郷古墳群の眺望ができる。さらに北方には高社山（一三五メートル）東南はるかに志賀高原の避峰が遠望できる景勝の地である。

この古墳を発見されたのは亀井正道・永峰光一先生である。信濃史料第一巻（考古編）編集のため、昭和二八年秋友子塚古墳を踏査された無途のことであった。七瀬部落へ通ずる坂道を降らうとする眼前に、円墳がススキの地のゆれる原野の中にあって、墳頂上には松が三本生い茂つていた。地名を冠して前山古墳と命名されたのである。かくして、信濃史料へは二一五番、文化庁の全国遺跡地図（長野県版）では七九〇四番と登載されている。

七瀬部落は、中野層状地が東から西へ展開する中心線よりやや南寄りの原端部に位置し、湧泉に恵まれ、また、扇状地を流下する堰が集水して水量の豊富なところでもある。弥生時代後期から耕作栽培が行われた地番で、第一表によつて知ることができる。

永峰丘陵は千曲川の蛇行に並行し、南北およそ九キロメートルに連なり、標高四八八メートルの壁田城山を除いては、四〇〇メートル

第一表 遺跡表

七瀬遺跡	名 称	立 地
台地	山腹の	摘 要
(秀生後期) 太形始瓦石斧、 器台、甕、瓮、高杯、 (土師前期) 塔三個、高杯、 その他破片多		

第二表 古墳表

「宮坂」と呼ばれ、この古道の右側にある。小池兵庫氏（七剣）によると前山古墳から宮坂をへだてた西隣りの台地状塚から四〇余年前に数片の鐵刀が出土し、自宅へ持ち帰つて置いたが、現在は不明の由であった。

遺  
稿

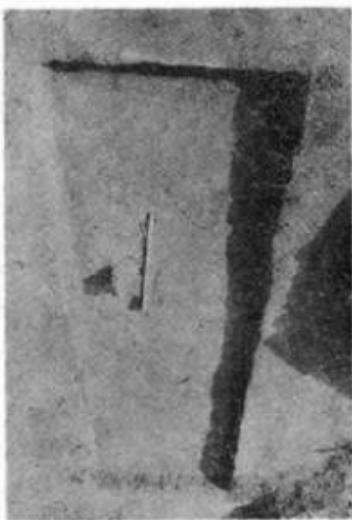
中野の市街地の西方の田園や村落をへだてて、通称長峯（長丘丘陵）と呼ばれる丘陵台地が、千曲川にそって細長く横たわっている。そのほぼ中央部に、奥信濃の千曲川東岸では、最北端の前方後

は第二表に示す古墳群が点在している。

円墳がある。市の史跡にも指定されている七瀬の双子塚古墳である。この古墳の東北、約二百米の位置に隣接しているのが、今回調査された前山古墳である。

前山古墳は、丘陵頂上部よりや東方へ突出した位置にある。丘陵を背に、眼下東方に、中野の市街地を中心とする中野扇状地を望める。周辺の志賀高原の山波と、高井の秀峰高社山を望み得る風致佳良な位置にある。また市内東方山麓や高社山麓、及び山ノ内町夜間瀬の古墳等も眺望できる位置もある。

古墳の外形をみると、形がくずれており、一見古墳かどうかまようところがある。しかし南側は確然とした高塚としての区切れがみられる。西側もまたその区西がみられる。しかし東側と西側は平地にむかっての斜面のせいか、高塚の末端が突出し、判然とした区画



第2回 遺構・遺物

はみられない。特に北側はその様相がいちじるしい。このような古墳があるので、明確な古墳の高さと直径は数字では言い切れないが、高いところで約二・四〇メートルで、径は約一六メートル一七メートルと言えよう。

今回の調査で明らかになった遺構は、大別して古墳内の堅穴式の粘土郭遺構と、古墳の構築の状況である。

まず粘土郭であるが、円墳のほぼ中央部に、ほぼ長方形の長さ三・九〇メートル、巾一・一一メートル、深さ〇・一〇メートルの存在を確認したことである。この遺構の表土層からは、高杯の破片數十点を確認し、さらにはその下部から、鉄刀一点と鍛錠十数点が、この遺構内中央部から発見された。遺物は別項で示すこととして、ここでは遺構の特色をとらえることとする。

その一つとしてこの粘土郭の方位である。北の正位より四十五度東にふれしており、その方位の先をたどると、高井の秀峰高社山の山頂に至ることである。高社山は、延喜式の式内社たる高社神社の本山であり、山頂から土師の小破片の出土も知られている。古代から、山岳信仰と深い関係のある聖山もある。したがつてこの山に対する原始・古代からの信仰の対象としての遺跡が周辺にあっても不思議ではない。明確な調査で明らかかなのは、時代は異なるが、山ノ内町夜間瀬の中世の千手寺經塚の石室の方位や、同町寒沢の富士宮の社殿の方位は、高社山頂に向けられている。したがつて高社山は、古くから現在に至るまで、信仰の対象としての事例がみられる。

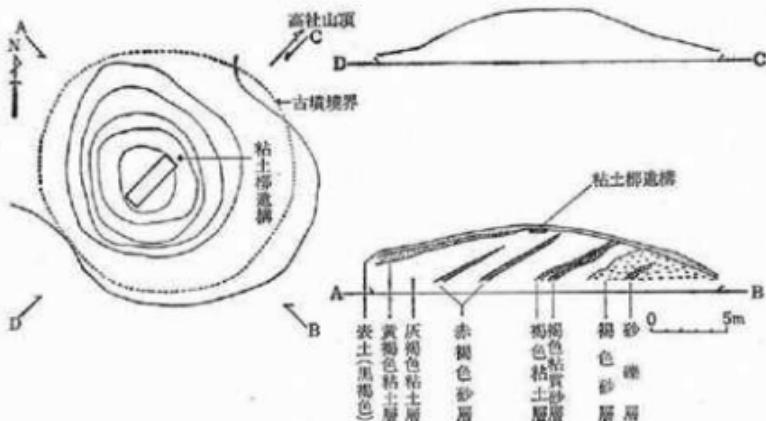
次に堅穴式の粘土郭を持つ古墳であるが、附近からその事例を求

めてみたい。奥信濃における古墳の学術調査は、比較的に例が少なくて正確には言ひ得ないが、この古墳と中野扇状地をへだて向かいあつて、東山山麓の嵯峨古墳もこの類と思われる。<sup>(3)</sup> また前山古墳の所在する長峯を北に下ると、<sup>(4)</sup> 田麦林畔二号墳や、<sup>(5)</sup> 厚貝山ノ神古墳も堅六式の粘土床であるが、この二者は丸太をくりぬいた木樋を置いたものと推定される。前山古墳ではその点は明らかでない。むしろ箱形状をなす粘土郭なるものが前山古墳の特色である。

さて高塚式古墳外部の様相をみよう。古墳を東西南北それぞれ四十五度ずらして、十文字にトレンチを入れて調べた。なおまた古墳をブルドーザーにて切りくずし、畑にする階段においての状態を示すと、次のようにある。即ち表土十数センチほどは、今までの耕作による作物用の土壤となっている。この一部分または大部分が盛土と考えられる。しかし特に保存状態のよい南側は、灰褐色粘土の粘性が強固なもので、盛土はごくわずかである。むしろ削減したと思われる。同じく保存のよい西側も赤褐色の粘性が強く保存がよいことは共通點と言える。それに比較して北側は、土質が軟弱の砂疊層のうえ、急斜面に連なる悪条件である。古墳の末端部には補強したと思える岩疊がみられたが、これは自然状態の岩疊層で、偶然に古墳を支えていたことが判明した。したがって南と西の面は高塚の保存がよく、東と北の面は保存がよくなかった。このような自然的条件たる土質と地形が関係しあって、保存状況を左右したと言ふことができる。

このような遺構の古墳を奥信濃だけにとつて考えてみると、古墳

第3図 前山古墳遺構



の規模においては、比較的小規模古墳とみられる。また山腹を利用して堅穴式粘土幕の古墳の様相からみるならば、全国的にみるとさほど古式ではないものであろう。しかし信濃では比較的古い部類になり得よう。また地方の大豪族の墳墓とみるよりは、小豪族または有力者の古墳とみられる。なお近接する双子塚古墳との関係等は、総合的に考察したり、また今後の課題ともなるであろう。

（田川　幸生）

註1 高社山頂の遺物略和四十九年五月山頂にて実見

註2 「手の藤塚」山ノ内町教育委員会 昭和五十年三月

註3 「植木塚・青柳原の山遺跡」中野市教育委員会 昭和四十四年三月

註4 「下高井」長野県教育委員会 昭和二十八年十二月

## 遺物

前山古墳の発掘調査によつて検出した遺物は左の如くである。

直刀 一口

鉄鏡 一本

土師器破片 小片 一五点 瓦片 四四点

直刀は、長さ八二センチで、柄の部分は一四センチで刃の一〇セ

ンチに当る部分に目釘穴と思われる所がある。刀長六八センチを数え、鏡の部分は平で厚さ〇・六センチを測り、身幅は中心部で一・八センチである。現在の重量は、六二〇グラムである。土庄のためか、五三・七センチの所で折損しており、柄の部分も僅か反っている。木製の鞘に収められていたらしく、僅かに附着している。また、その外の道具は腐朽して復原は困難である。刀身には穂の部分

ではなく、平作りで刃と柄の部分の間はなく次第に細くなつて断面は長方形になつて柄となつてゐる。鉄はやや鋸どく尖つていて、以上の如く観察するに、当時の実戦型の武器で勇者の愛用品であったと思われる。

鉄鏡 一本は遺存部分長一三・一四センチで尖

端が蛇頭型の尖根が三本、丸みをおびた劍型の平根鏡が一本、両者が混在して一束となつて検出

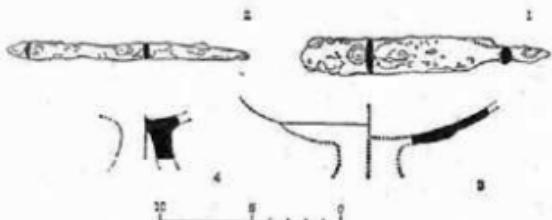
され、矢柄の所に木片が附着している。現在の重量が尖根鏡が一五グラム、平根鏡が三四グラムである。尖根鏡は三本とも同型の長鏡で尖端部の断面は三角型をしめし、尖端より二・五センチの部分から長方形となつて柄の部分にそのまま細くなつていて、

平根鏡も一本とも同型と思われ、尖端より、八センチの部分まで橢円形で、尖端は円みをおびた菱形の断面を示す。これも長鏡で尖端より九・五センチの間の部分から断面は長方形となつて、次第に正方形の断面になつて柄の部分となつていて、紫岩古墳・金蓮山古墳発見の鳴鑼用の平根鏡でなく、これまた実戦型の形容を示していると想定される。

土師器片は、内部主体部に隔壁された状態でな

第4回 直刀

第5図 鉄鏃・土器器



く、封土表面から、土中に破片となつて散在した状態で発見され、多くは墳墓の中心部に集中した状態で検出された。図3は外側に段が付されている。高杯の杯の部分で、4は高杯の脚部であり、いずれも胎土良好、焼成もかなりよく、ヘラ磨きが行なって赤褐色を呈し、土師器年では鬼高期のものと推定される。この外の破片中に一点の坏部があつてこれは、坏と脚をホゾで接合し、接合部の径は、三・五センチである。土師器片は3・4の外、小片一三片、細片四四片を数え、ほとんど高杯片と想定される。

(椎原  
長則)

この古墳の発掘調査は、八月上旬の晴天続々に恵まれ、七日間行程で完了した。これは事前準備に二日間を費し万全を期したこと、規模が小形で出土遺物の極めて僅少であったためである。



第6図 破片の発現状況

この古墳の発掘調査は、八月上旬の晴天続々に恵まれ、七日間行程で完了した。これは事前準備に二日間を費し万全を期したこと、規模が小形で出土遺物の極めて僅少であったためである。

豊野層から成る永峰丘陵の鞍部から一段下った小台地に土蔓頭状の径一八メートル、高さ四メートルの自然地形を利用して墳墓を築いたものであった。基壇は長さ三・九メートル、巾一・〇五メートルを掘りこぼめた堅穴式粘土郭で、木棺を納めたものと推定し、納棺後円墳状に盛土をしている。

副葬品は、直刀(全長八二センチ)一口、鉄鏃(長さ一三・一四センチ)はいづれも有柄のもので尖鋸鏃三本、平根鏃一本の計四本は腰に納めた形状で検出された。これらは埋葬者の胸郭から腰部に置かれて副葬されたものごとくである。墳頂の中央部からは土師器

小片四八点が出土し、高杯は三と四個体分にあたるものと推定される。出土状況から祭祀のために供獻されたものであろう。

古墳は河東最北端の大型前方後円墳であるにもかかわらず、副葬品の以外

に少ないことは奇とされているが、この前山古墳はそれにも増して僅少な副葬品であった。これは墓葬者の経済力の低さを物語っているのであるまいか。今後、周辺の遺跡や古墳群との関係を調査して、その性格を究めたい。

今回の調査にあたっては金井喜久一郎先生の指導助言を賜わり、地主藤沢栄治氏の御協力を得、長針功・小林行安・池田実治氏等の物心両面にわたる援助をいただいたことを感謝申しあげたい。

（金井 喜久一郎）

8  
8

III

✓  
L